

幼児が絵を描いている時(二)

未就園児の事例

青木 隆



幼稚園に入って来たばかりの四歳児(三年保育)でも、大多数は一応バスなり顔なり何かしらの絵が描ける。彼らはどんなものが「絵」で、どんなことをすれば「絵」が成り立つかをおぼろげながら知っている。このことは就園以前に絵について既に学んでいるからである。そこで今回は家庭にある幼児が、どんな絵を描き、そこから何を得ているかについて考えてみたい。

なお、なぐり描きの段階についても当然ふれるべきであるが、前回の知恵おくれの事例と重複するので省略し、それよりやや高い段階から、例をとることにした。ここに述べる三人はいずれも湘南地方のF市内、海岸に接した、まだまだ緑の多い静かな住宅地に住み、一日中母親と一緒に生活している幼児である。

そしてこれらは決して特殊な例ではなく、たまたま私とめぐり会ったばかりに引き合いに出されただけで、未就園児の描画場面としては、しごくありふれたものと思われる。

1

Aは二歳十カ月になる女の子であるが、小さな自転車を自由に乗り回すほど元気がいい。マンションの三階に住んでいて、三年生になるお姉さんがいる。Aと私とは何度も会ってはいるのだが、まだ遠慮がちで、特に母親と一緒に時は声をかけても直接私に返事をしてくれない。

ある日、私は彼女の家を訪ね、直接絵を描いてもらいたいむね申込んだ。Aは大きな目を見開いて、一瞬私を見つめていたが、はにかんで母親につかまってしまった。以下その時の描画

場面の概略である。

Aと私は向い合つてすわる。A、母親を呼ぶ。母親は私に、そばにいた方がいいかと問う。返事をしないうちに、Aが母親の手を強く引き、すわるようにせがむ。母親、Aの横にすわる。私が用意していったクレヨン（十六色）と画用紙（B4）を机の上に並べ、「なんでも好きなものを描いてください」とたのむ。

母親「どの色がいいの？」

A、だまって水色を取るが、母親の顔をしきりに見ている。

母親はだまって立ち上がり部屋を出る。母親を目で追う。

「ママ、ママ、ここ」と呼ぶ。

母親、Aが普段使っているクレヨン（同じメーカーの十六色、箱も全く同じ）を取つて来てすわる。

母親「こっちの使う？」

A持っていた水色をしまい。自分のクレヨンの箱から水色を

出す。

一枚目（水色）

画面右下のすみに小さなマルを描く。続けてもう一つマル。

いずれも筆圧は弱い。

A「おのみ」

母親「もっと大きく描いたら」

やや大きなマルを描き、中に目を描き入れる。

母親「お化けみたい」

A「ネコだよ、これ」再び顔を描く。

母親「なんだかお化けみたいネ」顔をぬりつぶす。

A「描けなくなった」クレヨンの先がへつて巻いた紙にひっかかる。（以上約二分間）

二枚目（赤）

A「こうでしょ。こうでしょ」と言いながら線を描く。

「あれ、むずかしい、三角」一部先端のとがった楕円を描く。

A「お舟、これ」ぬりつぶす。手の運動はだんだん細くなり、指を動かし振幅の短い連続的な往復運動に移って行く。

筆圧も一定してやや強くなる。

A「ここまでだけ」

大きな声で「ママ、ママ」体をよじつて母親の方を向く。

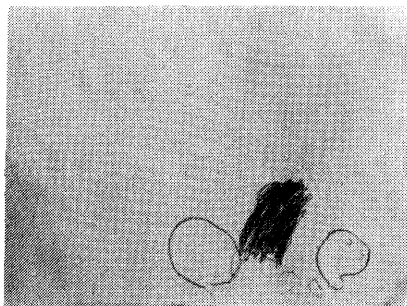
母親「なんなの？」

A「お舟」

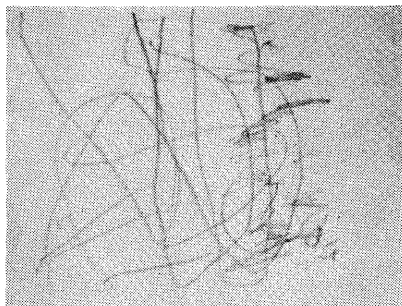
母親「そう、お舟なのネ」（以上二分弱）

三枚目（だいたい色）

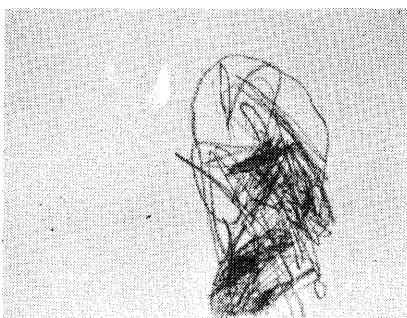
A 2歳・10か月 女兒



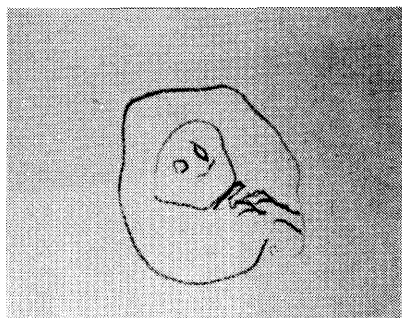
1枚目 お耳、ねこ



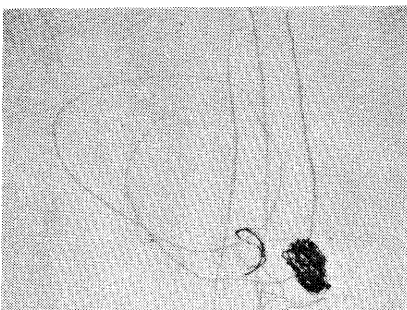
4枚目 階段



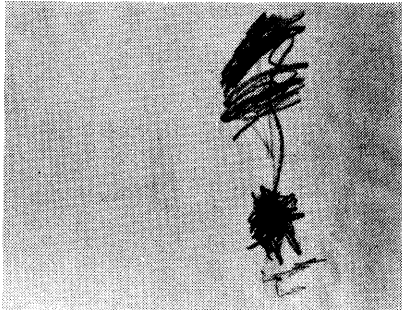
2枚目 お舟



5枚目 パパ(部分図)



3枚目 ペンギン、なわとび、汽車



7枚目

マルを描き入れ、

A 「ペンギンさん」なおその上からぬる。

母親「ペンギンさん見えなくなったの？」

A 「あんよ、見えてるよ」 (どれがペンギンなのか足なの

か不明)

黄緑を取り、A 「ペンギン描くの」と言って描き出すが、

A 「あっ、描けた、三角」 (これも三角には見えないが)

母親「三角のかたちしているのネ」

突然「ギンギン、ギラギラ……」と歌う。次に黄色を取る。

垂直線を一本描く。

A 「ほら、なわとび」

母親「それなあに？」

A 「なわとび、また描いてみるよ」もう一度平行して垂直線

を描き、続けて三本目を描く。次に大きく手を動かして右下か

らループ状の線を描き、同時に

「汽車汽車、シュッポ、シュッポ……」と歌う。

A 「ああ、できた」

母親「線路を描いたのネ、これ」(約四分間)

四枚目 (水色)

一枚目の時に描けなくなった水色を再び取る。この時玄関に

人が来て母親中座。クレヨンを机の上におき、箱をいじったり、クレヨンをぬきとった後のすき間をさわったりして、

A 「これはここだよ。あと、これ、あとこれ……」全く絵を描こうとしない。

A 「ママはやく」母親がもどって来る。水色で描こうとするが描けない。クレヨンを後から押し出そうとする。次に巻いてある紙をひっぱる。

A 「まちがえた」

母親「おしりを押すのよ」

A やってみるが先端が出ない。母親に渡す。母親、A にクレ

ヨンを示しながら「こういうふう……」

A 「ウンウン」母親の手もとをジッと見ている。水色を受け

とり、

A 「描けた」画面一パイに手を動かしてなぐり描き。

A 「キチキチ言わない」(巻いてある紙と画用紙がこすれ合

う音がしないの意)

母親「これなあに？」

A 「ひこうき」線を描いている途中でクレヨンが手から離れ

れる。

A 「あれ」と言って声を出して笑う。(かなりクレヨンを軽

くもって描いている)

A 「これ、こつつんこしているでしょ」指を使って振幅の狭い連続的な左右の往復運動。階段状に広がって行く。

A 「階段。こつつんこしているの」(すでに描いてある部分に、新しく描いた部分が接触すると、こつつんこと言う)

A 「ここまでだけ。くるくるだけよ」(約六分間)

五枚目(黒)

黒を取り上げながら、A 「これ黒」そして描きながら

「ピンクは赤でしょ」

母親「そうよ」画面右下に二重マルを描き、

A 「これパパなの」

母親「パパなにしてんの」

A 「目をつぶっているの」と言ったが、目を描き入れ、

A 「ほら、おくち……おくびはこういうふう……あんよ、

これ」頭部の下に三本ばかりの横線、その下に垂直の一对の線を描きおくる。

A 「おしまい」(二分弱)

母親「もっと描きたいの?」

ちよっとためらうが灰色を持つ。

六枚目(灰色)

A 「かたつむり……かたつむり、これ、……おしまい」(一

連の描画の中で最も簡単なもの、不完全な円、あるいは長い円弧が三つあるだけ。一分弱)

七枚目(黄緑)

A 「これ……」とだけ言って垂直線を描くが、

「あれ、まちがえた」その線の上から強い筆圧で左右の往復運動。同じ所をこしこし描く。

A 「もう疲れた」

母親「おしまいにしてもいいのよ」

「ウン、おしまい」(一分弱)

以上は二十分前後の出来事である。この例に見る母親はかなり受容的である。Aにしてみれば手のとどく所に母親がいて、自分を見守ってくれる。この安定した状況の中で、したいことをし、言いたいことを言う、母親がおだやかに受けとめてくれる。そして母親の「あいづち」によって強化され、ますます楽しく充実したものとなる。このようにして描画活動だけがもっている味わいを知って行くのであろう。

しかし母親と会話を交わしながらの描画が、いかなる時でも幼児にとって最善のものであると言うのではない。絵画の製作は本質的には一人きりで、黙々と試行し展開して行くべきもの

と思う。次にあげる例は母親につきそわれていたのだが、描画中に言語表現を全くともなわず、何かをしきりに模索するような傾向が見られたので、とりあげることにした。

2

Bは四歳のお誕生日をすぎたばかりの男の子である。現在一年生と幼稚園年少組の二人のお兄さんがいる。Bと私は全く初対面ではないが、ラポートがついていない。

ある日のこと、お兄さんたちは近くの友だちの家に集まり、絵を描いたり騒いだりしたあげく、おやつを食べていた。そこへBとその母親とが加わった。私はお母さんたちと別室で雑談をしていたが、Bは母親の隣へすわったり、お兄さんたちの所へ見に行ったりで、やや所在なさそうであった。私がBに絵を描くようにすすめてみると、案外気軽に立ち上がったので、私と一緒にさっきまでお兄さんたちが絵を描いていた部屋に入った。彼らは庭に出て遊んでおり、結局二人きりであった。

机に向かってすわったBの前にクレヨン(二十色)とスケッチブック(A4)を並べる。ジッと見ていたが、ションボリ立ち上がって母親のいる部屋にもどる。ドアの前に立つが入らない。母親の方も気付いて立って来る。母親の手を引いて私のところに連れて来る。

母親「一緒でもよろしいでしょうか」Bのななめ後方にすわる。Bは自分でクレヨンのふたを開けるが、指をくわえてジツとしている。

B小さな声で「やりたくないもん」

母親「お家ではいつも、いっぱい描いているでしょ」私の方を向いて「絵はとも好きで、よく一人きりで描いているんですよ」

B、母親の顔ばかり見ているが、再び「やりたくないもん」

母親がかさねて「なんでも好きなもの描いたらいいじゃない」……しばらくして指をくわえていたが、そっとクレヨンに手をのばした。

一枚目(赤)

左手を使う。マルを二つにジグザグの描線など、画面中央、やや下に描く。筆圧は弱く、一定していない。次に右下に顔(仮面ライダーか?)を描く。手を休め顔をあげ外を見る。

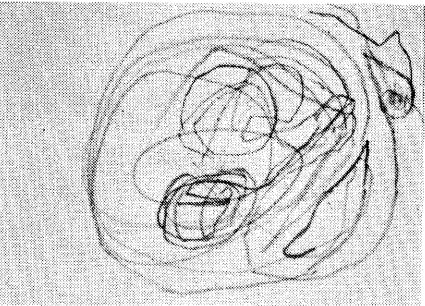
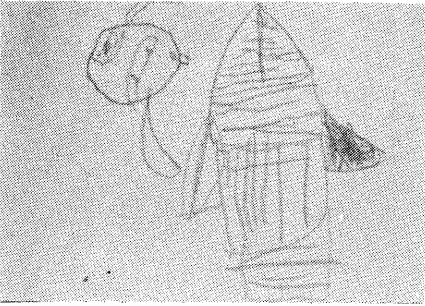
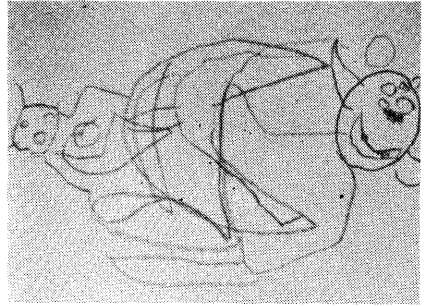
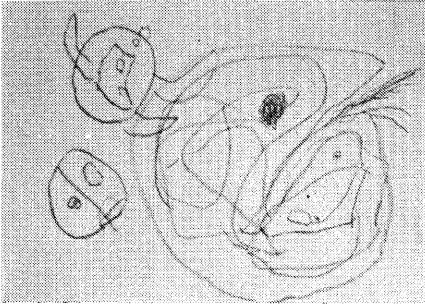
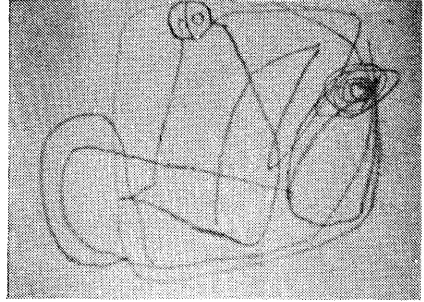
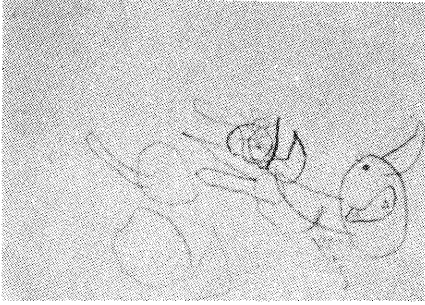
私「もうできたの」

うなずくが、モジモジしている。

私「もっと一パイ描きたいの?」

うなずく。紙をとりかえてあげる。

(黄緑)



B 4歳男児

- | 左上から | 右上から |
|-----------|------|
| 1枚目 | 8枚目 |
| 2枚目 | 9枚目 |
| 3枚目(ロケット) | 11枚目 |
| 7枚目 | |

右よりに不定形、それを組み合せたもの、中に小さなマルを描き入れたりするが、目的ではない。次に画面左に顔を二つ続けて描く。途中からクレヨンを右手にもちかえる。(右手で描いた線がのびのびしているように見えるが、場面緊張がとれて来たためかとも思われる)

三枚目(だいたい色)

右にロケットを描き、左に人間像。再びロケットにもどり、中部に多数の水平線、垂直線を描き込み、翼の一部をぬりつぶす。全く口をきかず、いそぎはしないが、ゆっくり手を動かして決して休まない。画面に目をそそいで、母親の方をふり向かない。描線も安定してきた。自分でスケッチブックをめくる。

四枚目(黄色)

三角を描き、次に逆向きの三角を接続させたように、シンメトリーのひし形を作る。左側に顔その他。すぐ紙を変える。母親静かに中座。

五枚目(緑)

描き始めるとすぐ兄弟たちが入って来て周囲に立つ。変な絵だの、何を描いたのかと口々に言う。Bはふり向きもせず、同じ速度で描く。マルの中に十字形など単純なパターン。探索的な描画。(ことさらに平静をよそわっているように感じら

れた)少し描くとすぐ紙を変えた。

六枚目(緑)

紙を変えるたびにクレヨンを変えていたが、ここではそのままの色を使う。人間像も描かれるが五枚目より粗雑になり、描線の速度は早くなり筆圧等も一定しない。兄弟たち途中で立ち去る。

七枚目(青)

連続的な円運動。六枚目より一層なぐり描きの傾向が強まる。母親が帰って来てもとの位置にすわる。ふり向いて右手をのびし、軽く母親の膝にふれる。そして描き続ける。描線の強弱・遅速などむらがある。途中で二回左手にもちかえて描く。

八枚目(黄土色)

中央に人間像、他は探索的で描線が交錯。クレヨンの保持も良好で描線は安定し、すべてが回復してくる。

九枚目(だいたい色)

横に倒れたような二つの人間像。(胴の部分で接続しているように見える。やはり形態の探索と言える描画)のびのび落ちていて描く。

十枚目(だいたい色)

そのままのクレヨンを使用。外で子どもたちの声が聞こえる

と、画面から目をはなし、ジツとしている。再び描き始めるが、内容はやや形態の模索からなぐり描きの傾向をおびる。

十一枚目(だいたい色)

クレヨンをかえず。

母親「Bちゃんの顔でも描いたら」

私「ママでもいいよ」

人物画を画面一パイに描く。

私「ママを描いたの?」

Bうなずく。(毛髪の部分が女性を表している)

十二枚目(だいたい色)

クレヨンはそのまま。描線は速くなる。

B「もういい」

私「もうおしまいにしたくなつたんだネ」

うなずく。私がお礼を言つて、スケッチブックとクレヨンをあげると、始めてニッコリ笑い、母親の顔を見る。二つの品をしっかりとかかえて立ち上がる。

以上がB君の描画場面約三十分間の推移である。この例はやや強引に部屋に連れ込まれた幼児が、なかば高圧的に絵を描かされ、それでもBは絵が好きなので、最初の緊張も描いて行くうちに消え没入していく。そしていろいろ画面の中で操作を試

みる訳だが、途中で母親がいなくなり、その上兄弟たちが入つて来て批判する。Bはなぐり描きに退行しかけるが、母親がもどつて来て再び安定をとりもどす。しかし描画そのものに飽きて来たので、ややなぐり描きに近づいて行く、このように要約できよう。時間的な経過と作品を引きくらべると、同一人物が三十分の間に描いた描線できえ、このように多様であることがわかる。そして外部からの刺激や、それにもなう心の動きが、描画の中に敏感に反映していることも十分感じられる。

また、マルや四角を並べたり組み合わせたりの、気ままであてどない模索は、一見全く無意味に思われがちだが、このような試みを通して彼らの内面的イメージはより豊富になり、自分で自身を引き上げて行く道が開かれるのである。私とのレポートの十分でないBの場合は、このような探索行動に没頭するために、ママと一緒に言う心の安定を前提としていたことを忘れてはならない。

3

第三の例は四歳一カ月になる女の子Cで、四月には幼稚園に入ることになる。ガッチリした体つきで、言語もなかなか達者で快活である。第一にあげたAと同じマンションの四階に住み、一年生のお姉さんがいる。Cは誰ともすぐ仲よくなれるし、私

とのラポートもあり、当人の家で絵を描くこともあって、今回は母親と一緒にではなかった。

Cに絵を描いてほしいと申し入れると、お姉さんやお友だちともう少し遊んでからと言う返事だった。ころあいを見て再度聞くと、今度は「おやつを食べてから」であった。あまり待たされるので、「今日は駄目らしいですネ、あまりおいそがしうで……」と言うと、「もう少ししたら描いてあげるから、待ってて」と言うことであった。

やつのことで二人は別室に行く。(かれこれ一年ほど前にも絵を描いてもらったことがあるが、その時のことをおぼえていて、しきりにはしゃいでいる。やつと落着いてすわる)クレヨン(十六色)と画用紙(B4)を置く。さっそくふたを開き、C「何色があるかな……こんな色。ピンクにしようかな……それじゃあ紫」結局紫を取り出す。

一枚目(紫)

ほおづえをついて、ゆっくり描き始める。五センチほどの小さな人間像をポツンと中央に描き、

C「できちゃった」

私「もうおわりなの?」

C「ウン、そうよ」(約二分間)

二枚目(だいたい色・はだ色、水色、黄緑、黒、灰色)

C「今度は何色にしようかな。白はあんまり見えないし……。オレンジにしよう」別室でお姉さんたちの声

C「あそんでる」ちよつと手を休める。オレンジで右下すみに描き始める。はだ色に変え、次に水色で描く。ため息をつき、顔を上げ、私と視線が合うと、

「これリスちゃん、牛の上に乗っかってるの」と説明する。そして

「これ牛の耳なの」と言いながら、黄緑で足を、黒で耳をぬる。(以上六分間)

三枚目(桃色)

「こんどは何色にしようかな。黒にしようかな。ピンク色だ」右下に描く。

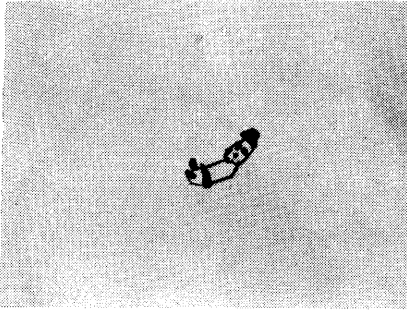
C「サクランボができたの……トンボでした」次々に加筆して変えて行く。

私「トンボ描いたの」

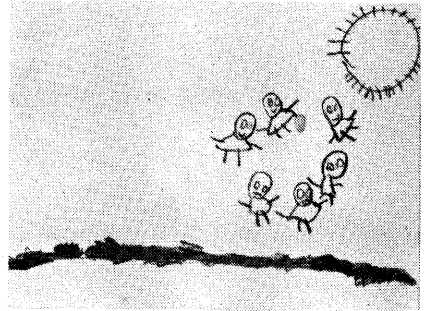
C「ちがいました。ただのお馬よ。でも中に人が入っているの」右上部に四角を描き、内に人間像。

C「窓のところでなんか見てるの。……映画見てるの。……ちがいましたテレビでした」放射状に四本の脚を描く。また

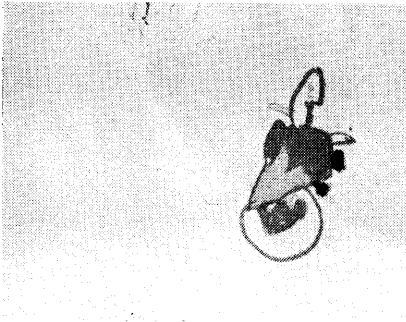
C 4歳1カ月 女兒



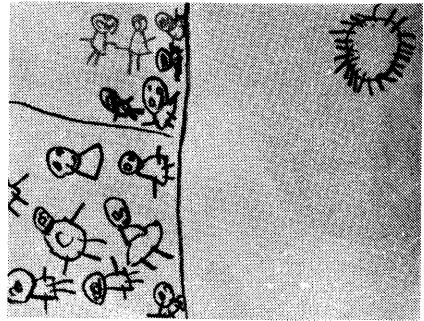
1枚目 部分図



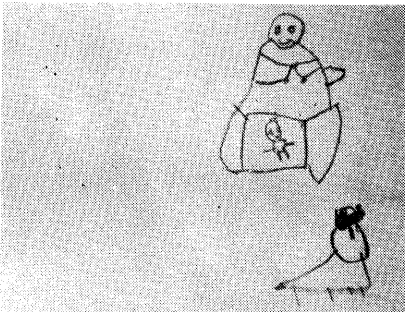
4枚目 ボールあそび



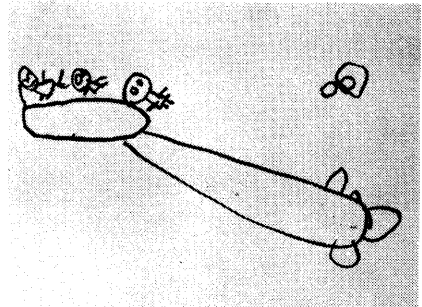
2枚目 リスと牛(部分図)



5枚目 プール



3枚目 馬、お化け



6枚目 お舟

筆して、

C「今度はお祭の時のあれ」

私「おみこしのことでしょ」

C「お祭の時、いつもやっているの」次に顔と胴を描きテレビと接続してしまふ。

私「誰がいるの」

C「わかんない」腕を描き、

C「まだわかんない」そして最後に「これ、お化け」声を出して笑う。(四分間)

四枚目(だいたい色、白、赤、緑)

C「今度はおレンジと白、混ぜるの、だって白、出ないんだもの」小さなマルを二色でぬりつぶす。

C「ええと」赤を取り右上すみに太陽を描き、丁寧に放射線を引く。C「もうこんなお天気だもの。雲は何色にしようかな」

(雲は描かない)草はこれだね」と言つて緑をとる。水平線を画面一パイに引き、左端から一本ずつ草を描く。ほど進むが草をぬりつぶし、水平線全体を幅一センチほどにする。

C「草ができない……草がはえているの。そうよ」突然話題を変えて私に話しかける。しかし画面から目を離さず、作業は続く。

C「家の鳥、まだかえってないんだ。きんか鳥なんだ。……きんか鳥の下に、卵、落ちてたんだ」最初に描いたオレンジと

白のマルを指し「これボール」横に人間を描き、

「はずかしいって言ってるの」と言つて自分も肩をすくめる。続けて人間を描き、

「もう一つの人はネ、この人もはずかしいって言ってるの」合計六人描く。一人を指して

「つまんないのって言っているの。でもみんなボールあそびしてるの」(以上七分間)

五枚目(緑、桃色)

クレヨンはそのまま使う。

「さっきのやろうかな、疲れちゃうから」と言つて四枚目と同じような位置に緑で太陽を描く。

C「プール描こうかな」中央近くに垂直線を描き、更に左側に水平の線を引き上下を二分する。「こっちの方は小さい方、こっちの方は大きい方」

C「泳いでるの」と言いながら左下の空間に人間を描き入れる。

C「こっちは大きい方、ちっちゃい方は誰もいないの」私「大きい方は大きい人が泳ぐとこなの?」

C 「どっちも子ども」左上のプールのにも人間を描き出す。

C 「こっちの方はあんまりいないの。これ一番小さい子」左上のすみを指し、

「人、描いてないの、こっちは」ピンクに変えてなお三人描きました。中の一つの画像はプールのふちを表わす描線に重なる。

C 「ここにかけて、パチャパチャやって……この人」重なった部分を指して言う。(六分間)

六枚目(黒)

C 「手がベタベタしてきちゃった。やめようかな」と言うが新しい紙に変える。

「黒にしよかな」細長い楕円のようなものを描き、「舟に乗っているの」三人の人間を描く。

C 「こっちのネ、後にネ、ブーンとやって来たの」右下の方向に描き加え、いくつかのマルなど描くが、

C 「もうやだ。つまんなくなってきた」と言ってドンドンかたづけける。(二分間)

以上はほぼ三十分間である。C子の場合には自宅で楽しく描いている。そのため描線はどの作品をとっても大きな変化はなく、ほぼ一定している。それでも初めは画像が小さく、三枚目あた

りから大きくなり出し、描線の固さもとれていく。四枚目以降は画面全体を有効に使うようになる。また描画中とりわけ外部からの大きな変化は加わらなかったが、無関係なおしやべりしながらでも、同じペースで描き続けていた。なお三枚目でサ克蘭ボがトンボになり鳥になり馬になってしまいが、このような展開は幼児画によく見られる。描いているうちに、次々といろいろなイメージが連想され、主題が変化していく。このような連想あそびは決してさまたげてはならない。また四枚目から人間を描く前に水平線を描く箇所があるが、確かな主題の意識のないまま描き出してしまうと、幼児はとりあえず水平線から描き始めることがある。(つづく)

本誌定価改訂のおしらせ

このたび諸材料費値上りのため、やむをえず本誌の定価及びページ数を左記の通り改訂させていただきます。なにとぞご諒承の上、引き続きご愛読下さいますようお願い申し上げます。

記

一、「幼児の教育」一部定価一七〇円(本文六十四ページ)

昭和四十九年一月号より改訂 以上

昭和四十八年十二月

発行所 株式会社フレール館